

水天宮御利生記

石井富太郎著

上

館籍連會資教本日大			
三	一	三	三
二册	六號	二架	七函

特36

584

014302-000-6

特36-584

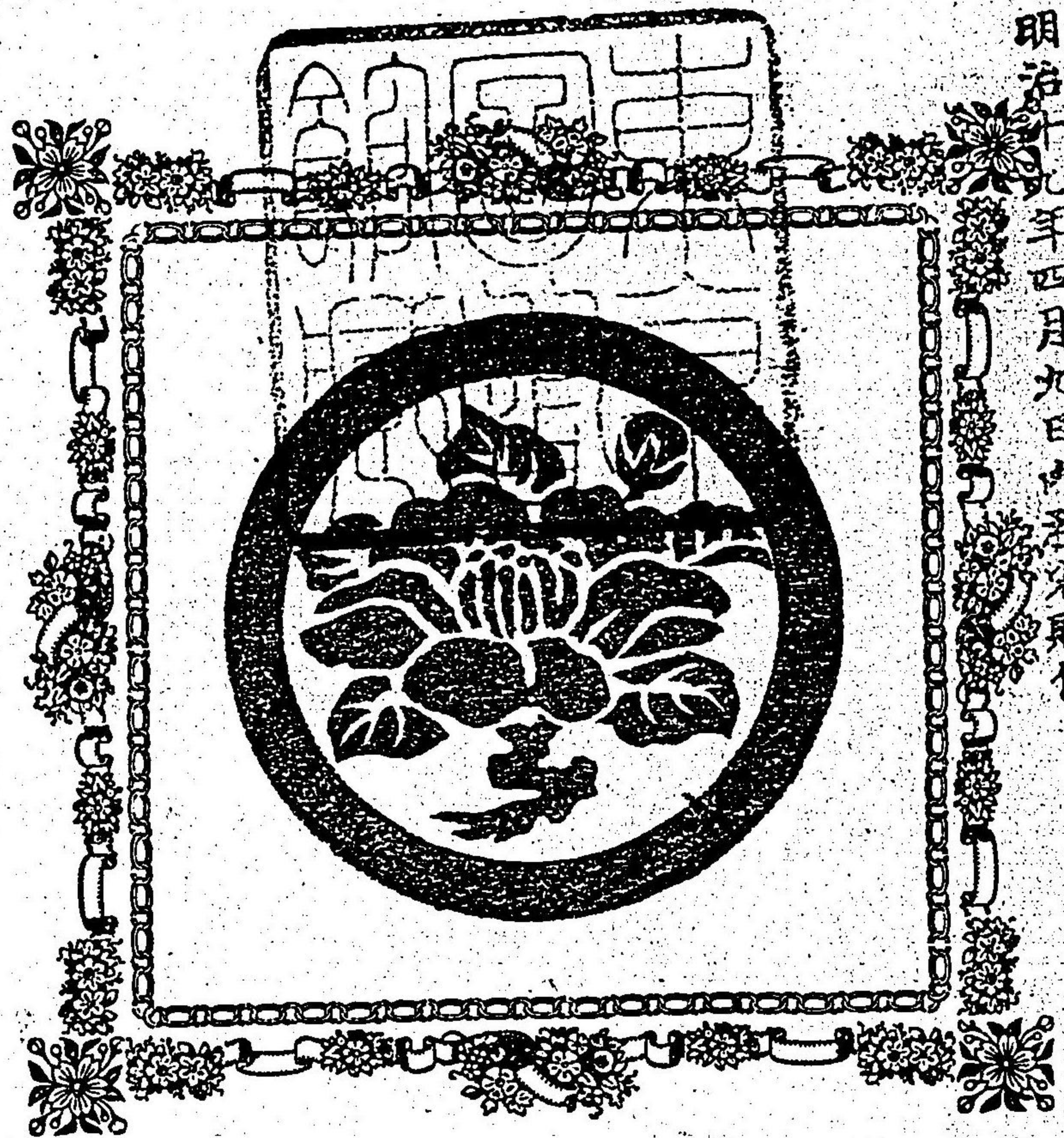
水天宮御利生記 卷上

石井 富太郎/著

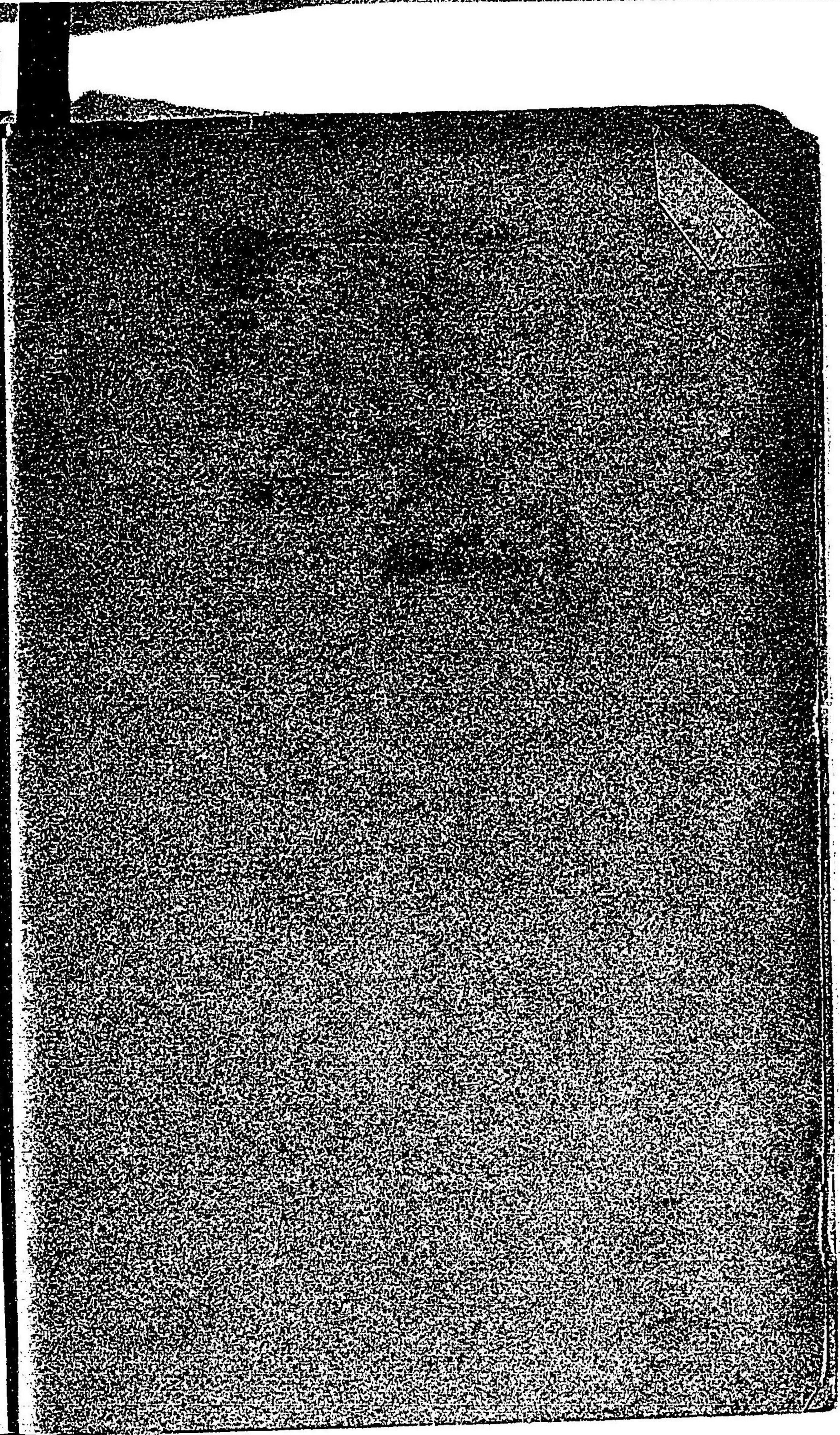
M19

ABB-0645





明治十九年四月九日内務省贈付

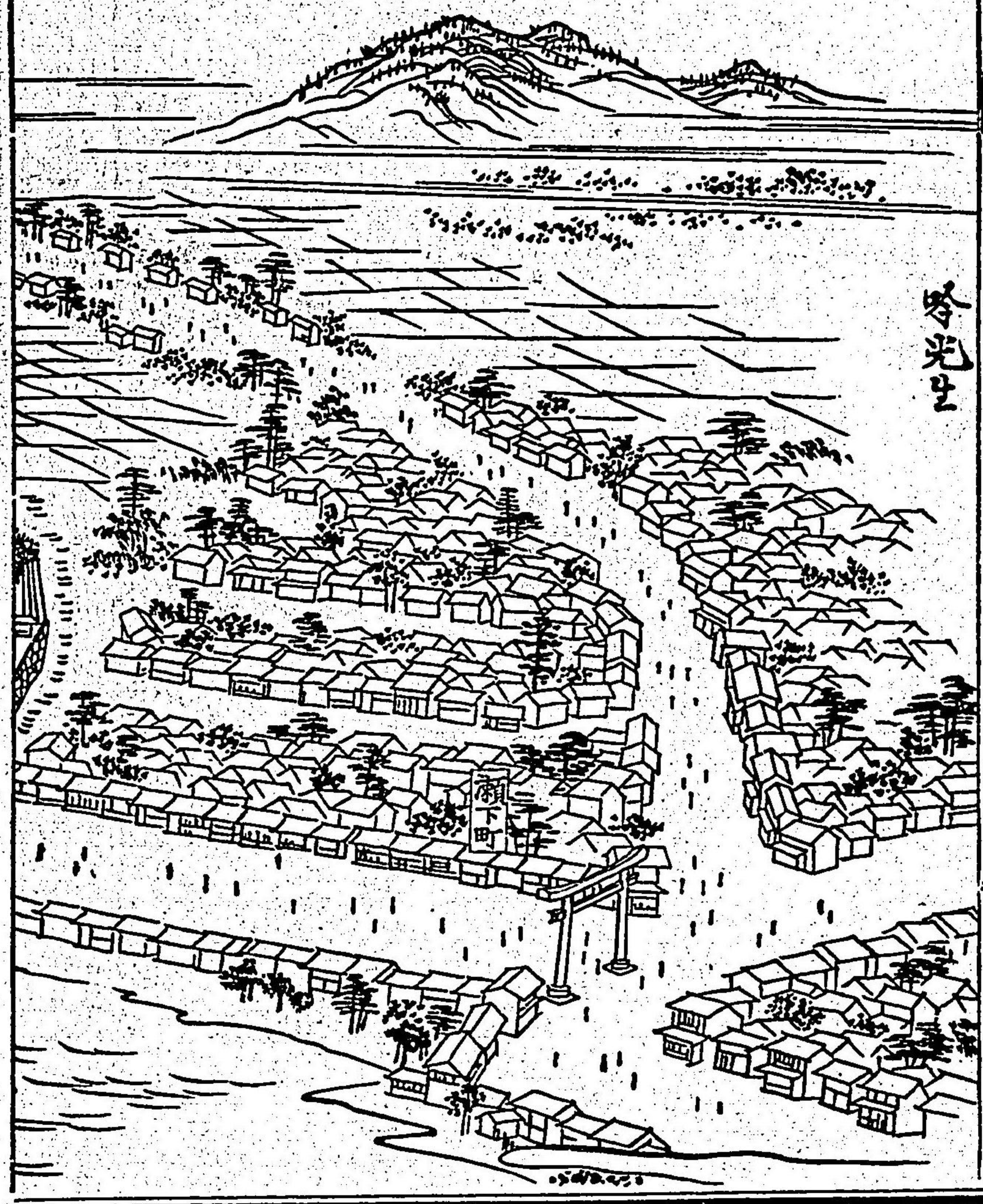


水天宮御利生記

題序

本書の御本社は九州筑後國久留米瀬下鎮座東京
 まで日本橋區蠣殻町に建てたせ玉ふ水天宮作本
 靈の安徳天皇平中宮二位尼作三躰を祭り玉へる
 起原より爾來靈驗の新なる數々を集めて神徳を
 顯はし奉る所なり尤も壇の浦の戦ひの事の正史
 の本より東鑑盛衰記大江廣元日記などふも委し
 く見えて和漢年契も文治元年養和帝入海崩と
 記志、上の其れを以て正實とすべし亡論の事
 なるが異傳ふよりて考ふれば亦疑ひなきにもあ
 らむ苟え天つ日嗣の作上より、る傷ましき事あ

筑後國瀬の下水天宮圖

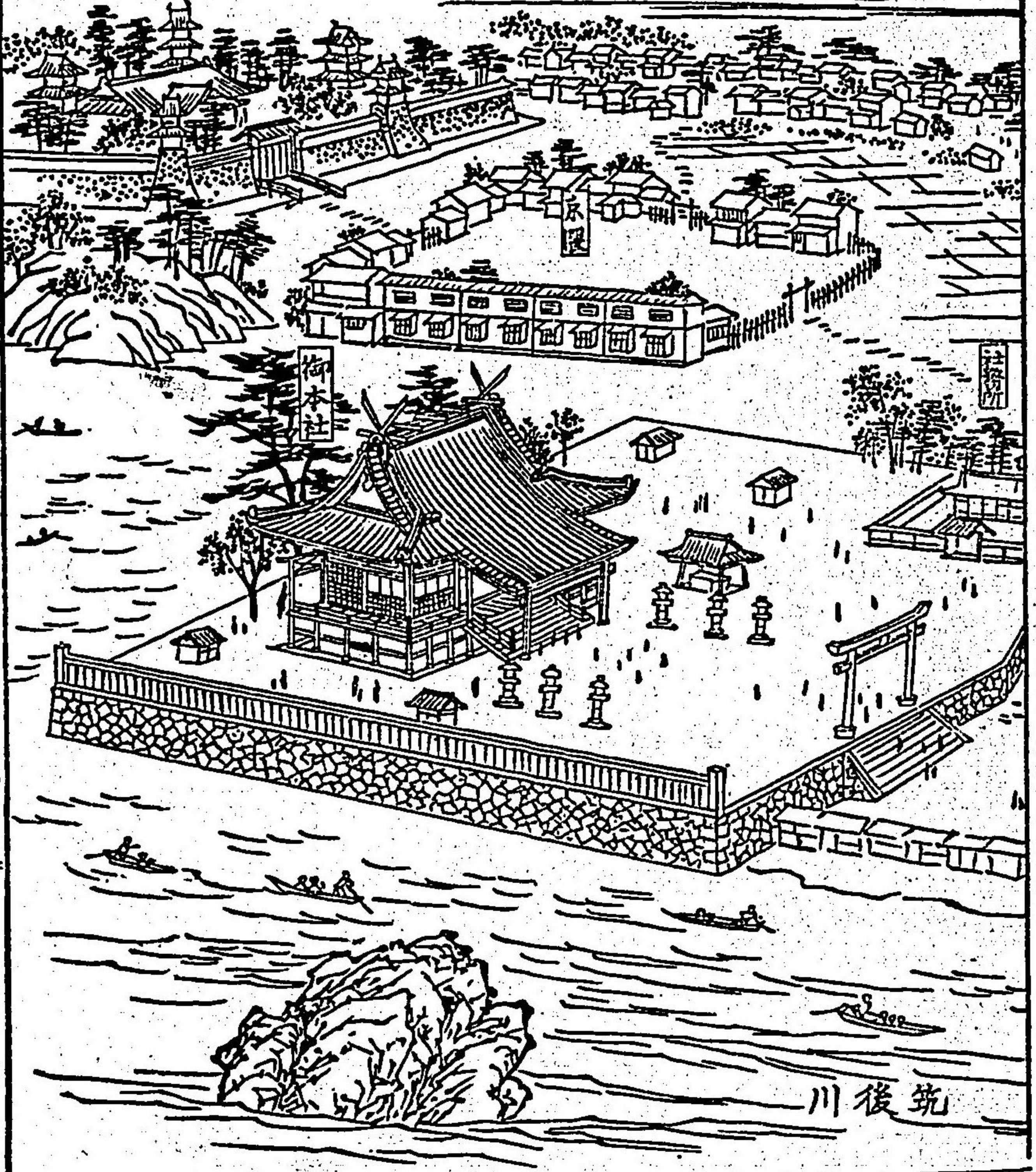


日光

水天宮

瀬

又留米城



筑後川

水天宮

瀬

舉げしより次いで源頼朝木曾義仲も同じく白ら旗
 を翻へし其の翌年の即ち養和の元年此の春清盛も
 薨去せられぬ翌々壽永二年に至りては源氏の勢ひ
 日に烈しく七月の木曾義仲の軍勢ぞ先京より入
 りたりける平家の遂に都に溜らむ帝を守護し奉り
 て須磨や明石と落ちたるは猶息をも繼がせむ範頼
 義経一の谷鶴越をも攻め落し西海の波は漂はせ奉
 り八嶋壇の浦の戦ひは雙方目覺しき働きて景清
 三保谷が鏖引より那須與市が扇の能登守の弓勢
 ぶ次信の身代り残念なりと教経が船漕ぎ寄せて近
 づくに組まれては叶はじと判官が二丈あまを隔
 たりたる佐々木の船に飛び移る流石の鞍馬天狗の

高第教経え力及ばむ飛んだりやと譽めあ
 る是れ八艘飛びの名譽の残る所なり此く平家にて
 も働きたりせしもいづれ叶はぬ運の果て新中納言知
 盛の卿が作船へ参られ最早軍のほども見えたり各
 おん支度いへと申し上げられ船掃除に取り掛られ
 たるにぞ數多の官女達一同に聲擧げて泣き惑はる
 外ぞなき知盛の卿の作道しるべせんとも大坂を
 背に負ひて海へざんぶと沈まれたるは事の赫勇々
 敷りりあり教経にも敵二人を諸脇に掻い込み同じ
 く是も沈まるか、りければ今の早とて二位の尼(時
 子と申を平相國の内室即ち中宮の侍女君なり)八歳
 の帝を抱きまゐらせ船屋形の上に出でましたり女

壇の浦
御入水
の圖



應永
吟光

大正...

備...

院(即ち中宮)も後れじと俱ふ稱名し玉ひは、此の時幼帝の作歌こそ後の世までも涙の種母残りたる

今ぞ知る御裳濯川の流れよ波の下ふも
みやこありとい
の作歌なり詠み元果てを水入りて海漫々とする
荒浪よ姿の見えむ成り玉ひぬ衰れとも畏しとも申
さん様どなき女院につきて飛び入り玉ひしを源
氏の船漕ぎ寄せ熊手ふそ掻き上げ奉りたる猶更
肝え消え玉ひけんと推し量られぬ其の他の上臈官
女達も皆同じ状なれば誠母目え當てらまぬ有様な
りた之れを後世彼れ有名なる頼山陽が海鹿吹波鼓

序死。推龍出沒狂瀾紫。敗鱗蔽海春風腥。滄溟變作桃花
水と作りたるの今日の前に見るやう母最衰れな
り是れぞ文治元年乙巳三月廿四日の事母一々時め
さし平家もこゝよ亡びたりた(今茲明治十九年丙戌
を距ること七百二年なり)

安徳天皇壇の浦落ちの事 異傳

元暦元年三月(年契ふての翌文治元年と有り)壇乃浦
の戦む最早平家の方の頼み少なく見えさるふぞ新
中納言知盛卿の作船へ参らざるふ二位尼ふの早
覺悟れ躰なり(二位尼の知盛もおん母なる)知盛申
する、の女院(知盛よおん妹なり)ふの天下の國母
に渡らせ玉へば敵も羸忽の扱ひの何るべうらむ但

一當家が戴き奉る主上を渡さんこと思ひも奇ろ
 き去れば是れより知盛守護して何くへなりとも落
 し奉るべしとして從臣伊賀平内左衛門家長彌平兵衛
 宗清の二人を具し二位尼按察使局(此の局は事の
 下母述ぶべし是れ水天宮建立は始めなり)等と共母
 主上を守護し豊前國小倉母上が玉ふ(小倉の壇の
 浦より海上一里ばうり)筑前國八町峠を越え筑後川
 を渡りて草野の方へ趣き玉ふ(草野の今山本郡の
 一村なり)其の頃の草野永平發心が嶽母據り源氏
 方なるに因り此くと聞きたる直ち兵を出して取り
 圍む事急なまは家長が錦の直垂を着て我まこそ平
 家の一門母其の人有りぞ知らきたる新中納言知

盛なるぞと名乗りて花々しく働きて討死す(今竹野
 郡平村ふ知盛塚あり)其の際主上の常持村はて
 落ち延び玉ひ庄の前より舟を召りま宮に地に着
 たり玉ひ久留米篠山に地頭松田某方へ勅使を立てら
 せあるまど松田早速出でて迎へ小森野より作上陸
 松田が館に入御有り自ら世を忍び玉ふおん事をま
 ば館の住居に居る心苦しとして松田が別荘乃白口村(久
 留米より一里)有りける母移らせ玉ひ遂に元久二
 年作寶算二十八歳まで此所にて崩御有りせらる(今
 白口村の一村に悉く安徳を以て氏と以御尊散の篠
 山ふ納め奉り作菩提寺の京隈日輪寺是まぬり(京隈
 此事前乃按察使局に身乃上と共に下は迷ふべし)

按察使局の事

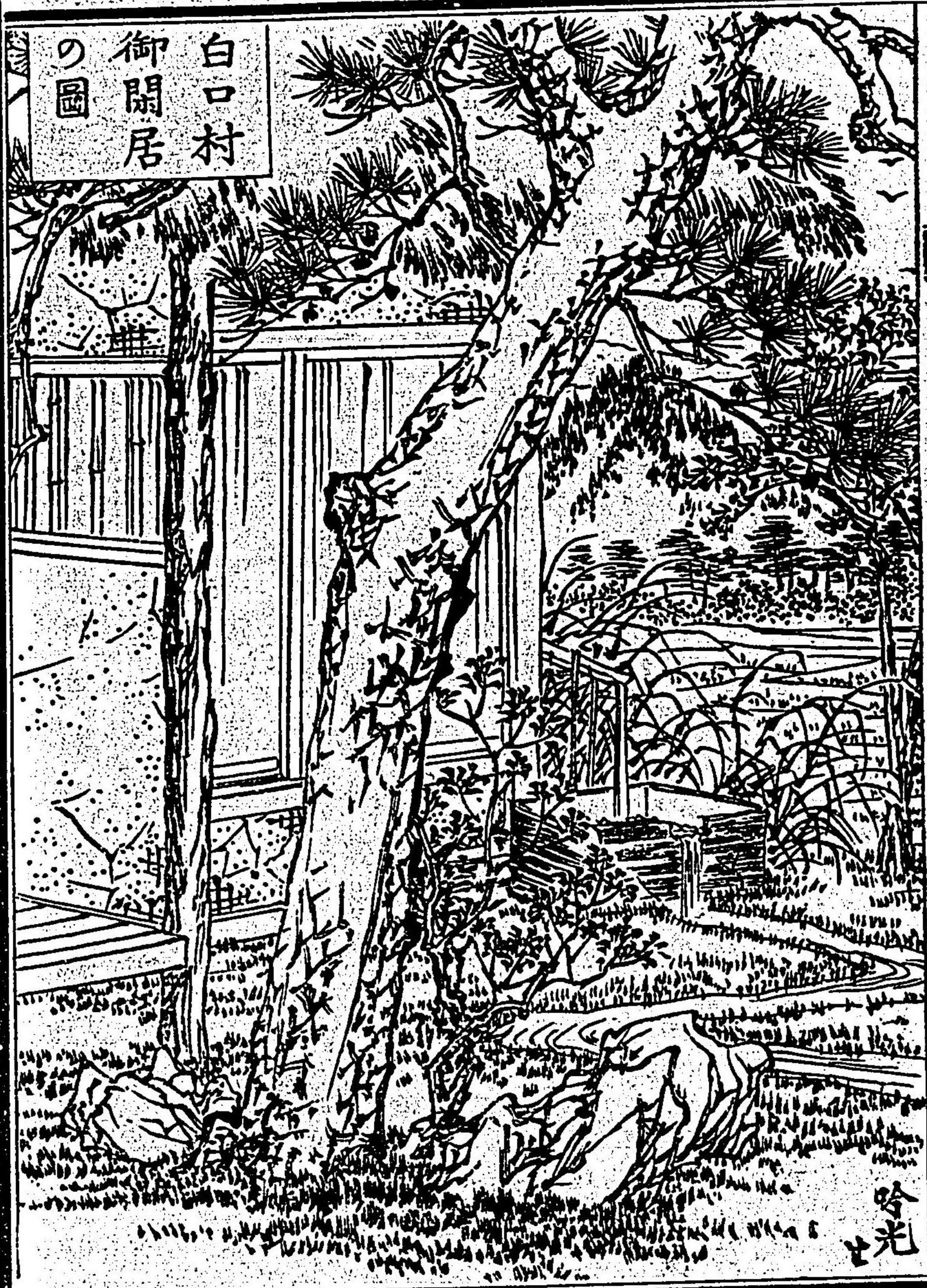
按察使局の大和國石上布留神社祠官の女にて元の
 名伊勢と申す効を奏しより平相國の北の方二位
 時子に奉仕せり嘉應三年其の姫君入内の折り伊勢
 の萬に物馴ま賢きものなまはとてお附き人
 せらま官女となりたるふぞ按察使局とい稱しあり
 去まば壽永の都落ちより讃岐長門の海ばらゆても
 女院に離まを甲斐よりくわしづたしが三月廿四
 日又もや瓊れ浦をも落ち玉はんと計らひ玉ふ折柄
 局のもとより女院に從ひ女院敵に取らま玉は己
 きもいづくゆでもと歎さけるを其まも去る理りな
 がら女院にかん事の中々心づうひ何るべあらま

効けるま主上におん冊きこそ大切なまとて此所ふ
 て女院に別ま奉りて西國落ちれおん供のせらまた
 るなり此くて筑後國に落ち着るせ給ひて凡二十
 年が間の片時も帝におん傍を離まを二位尼に聊
 早く過ぎさせ玉ひさるも天さうる筑紫に果てれ鄙
 住居幾年月の其れ間去りし都に昔を忍び又見るも
 恐ろしうりし船軍に戦ひ東男等が荒らくきたる状
 まど折に觸きて思ひ出で玉ひ如何に衰しきおん
 物語り等局に絶えを聞きもし聞うまも玉ひし
 なるべし荒ら浪れ上ふ久しくさまらひ玉ひに就
 きて凡世れ中み船れ上ほど心苦しきもれいな
 又瓊乃浦ふての面れあさり海豚といへる大魚乃喰

と反りたる様をも作覽せらまされば(廣元日記)載せたり(水)中(に)つゝる様々(れ)畏(ろ)し(た)え(る)も有りけりと賢くも信身(ふ)つ(は)され(玉)ひ(我)れ(此)乃(世)一(魂)を(残)さ(ば)世(乃)中(乃)あ(ら)ゆ(る)水(難)を(護)る(べ)た(ぞ)と普(む)玉(む)け(ん)も(理)り(母)お(そ)又(作)母(乃)女(院)と(も)ふ一(つ)作(船)母(漂)む(居)玉(む)さ(れ)ば(九)重(乃)大(宮)住(居)と(違)ひ(朝)夕(持)母(親)く(寄)り(添)は(せ)玉(ふ)こ(と)凡(夫)の(我)々(異)なる(こ)と(な)し(去)れば(八)歳(の)お(別)れ(の)時(の)際(の)推(作)こ(ゝ)ろ(に)も(衰)しく(思)召(け)む(此)く(母)子(の)情(愛)の(深)く(信)身(に)深(ま)込(は)せ(玉)へ(ば)今(日)ふ(至)る(海)で(作)靈(驗)の(分)けて(産)婦(の)守(り)に(著)た(り)其(の)謂(は)れ(あ)る(こ)と、(覺)え(侍)り(ぬ)因(り)て(崩)御(の)後(作)遺(命)ふ(任)せ

て(局)の(筑)後(川)の(岸)なる(鷺)野(原)一(今)の(瀬)下(本)社(より)北(二)丁(ば)う(り)の(所)なり(始)て(水)天(宮)を(祠)り(り)其(の)年(號)の(確)一(の)詳(う)なら(ね)ど(建)永(より)建(曆)の(間)の(思)は(る)其(を)如(何)ふ(と)云(ふ)母(承)元(建)永(と)建(曆)の(間)の(年)號(三)年(に)一(人)の(比)丘(来)り(て)局(の)懸(母)作(祠)ふ(仕)へ(奉)る(を)感(じ)己(れ)も(法)華(經)九(萬)部(を)供(養)し(たり)即(ち)前(章)に(述)べ(と)る(京)限(の)經(九)萬(と)云(へ)る(より)起(れる)名(なる)こ(と)疑(ふ)べ(哉)所(なき)一(似)あり(此)の(局)後(の)髮(を)落(して)尼(と)あり(名)を(千)代(と)改(め)ら(せ)百(餘)歳(は)で(存)ら(へ)ら(れ)あり(千)代(尼)の(養)子(ぞ)則(ち)瀬(下)水(天)宮(奉)仕(現)今(祠)官(真)木(氏)の(先)祖(ぬ)其(の)委(し)た(お)と(り)古(老)より(の)聞(衆)傳(へ)下(章)ふ(述)ぶ(べ)し

白口村
御閑居
の圖



光



水天宮御利住記

十一
言水

新中納言知盛卿の後裔の事

知盛卿の主上伏守護一海あらせ筑後筥山海で落ち
給ひし其の紛れあまとなす帝母後れられしや
先立たれしやの詳うあらむ此の時既に天下の源
氏の代とあり變はりたれば平家の一門山一斃れ海
ふ沈みたる残りの人々の皆秋の木の葉と同じく己
が様々散り失せ譬へば女院一附貴從はれあふ數多
の官女達とてえ衰れあふか皆海邊に彷徨ひ遂に
の情けを賣ゆ遊女と成り果てしど無慙あふ去れば
海邊と云へば則ち今の馬關ふして馬關の娼妓一
限り今日母至はまで常に襪を脱かむと云ふ宮仕へ
の昔を忍ぶ由縁とく最殊勝あり之れを頼山陽が赤

馬關竹枝の詩一至今猶著輕羅襪應記朝天凌綠波一と
の作りたるありう、有様あれば諸々の公達と
も行方慥なれの中々あし筑後の五條屋部肥後の
五家おどいへば奥山の又奥ありあは所一と獲の
村落を成せは是れ皆平家の落ち人の末ありけり(領
主より士分の取扱ひせは家々も有りと聞くと知盛卿
の二男の少將知時と申す其の子を儕と申せは形
のごとく流浪まう一所不定ふ彷徨けるが祖父知盛
の草野永平が爲ふ討たれぬとまで聞き居たれば
筑後の竹野郡まで渡り来まに知盛塚と所の者が言
へるを便りし詰で見れば答むまろ敷き生へと竹野
中ふ形ばりの印石あるのまに其れと分くべき

様もあく只坐ふ心のみの回向まつ、帝のおん跡を
 も吊ひ奉らんと笠山の方へ志ざま漸やくおまゝ御
 尊敵の二の丸内に納めありま作菩提所の京隈日輪
 寺なりと聞き得ま其れへ請て轄ま此の邊に留ま
 り居たりま母ゆくりあく千代尼母達ひ各身の上を
 語り合ひさる末千代尼も早年いたく老たれば祠の
 仕へもこゝろに任せまとして則ち儕を請ひて己が養
 子と志祠職と爲せり是れぞ祠官真木氏の元祖よし
 て有名なる新中納言平知盛卿の後胤なれば宜ある
 かあ明治維新の初め當職なる真木和泉守の古今一
 秀でし文武の達人ま薩州長州の今雲井の上一成
 り出でらるゝ歴々も皆久留米の泉州々々と尊び

られしあり惜しいうな京都軍の時天王山にて割腹
 を遂げしが一昨年諸緝神の發起ま其の祠を建て
 紫籬(和泉守の號なり)神社と稱し現母嬭殿町作社殿
 の傍に築造せられ特一の畏くも宮内省より金百圓
 を賜はり祭奠の時三條太政大臣公を始め諸公紅
 葉館に参集ありて此く申は某も妄りに一座お列お
 り侍べりま安徳天皇平中宮二位尼作合祭の水天宮
 の階に並びて新中納言知盛卿の子孫の祠まで建
 てらるゝ明治の代こそ有り難けれ
 編者白江泉州の履歴に就ての願る目覺ましき
 次第數々あれども此の作本記より別事あれば
 之れを載せま但作本社に因みある家筋の事あ

れば更に刊出することあるべし
御社沿革の事

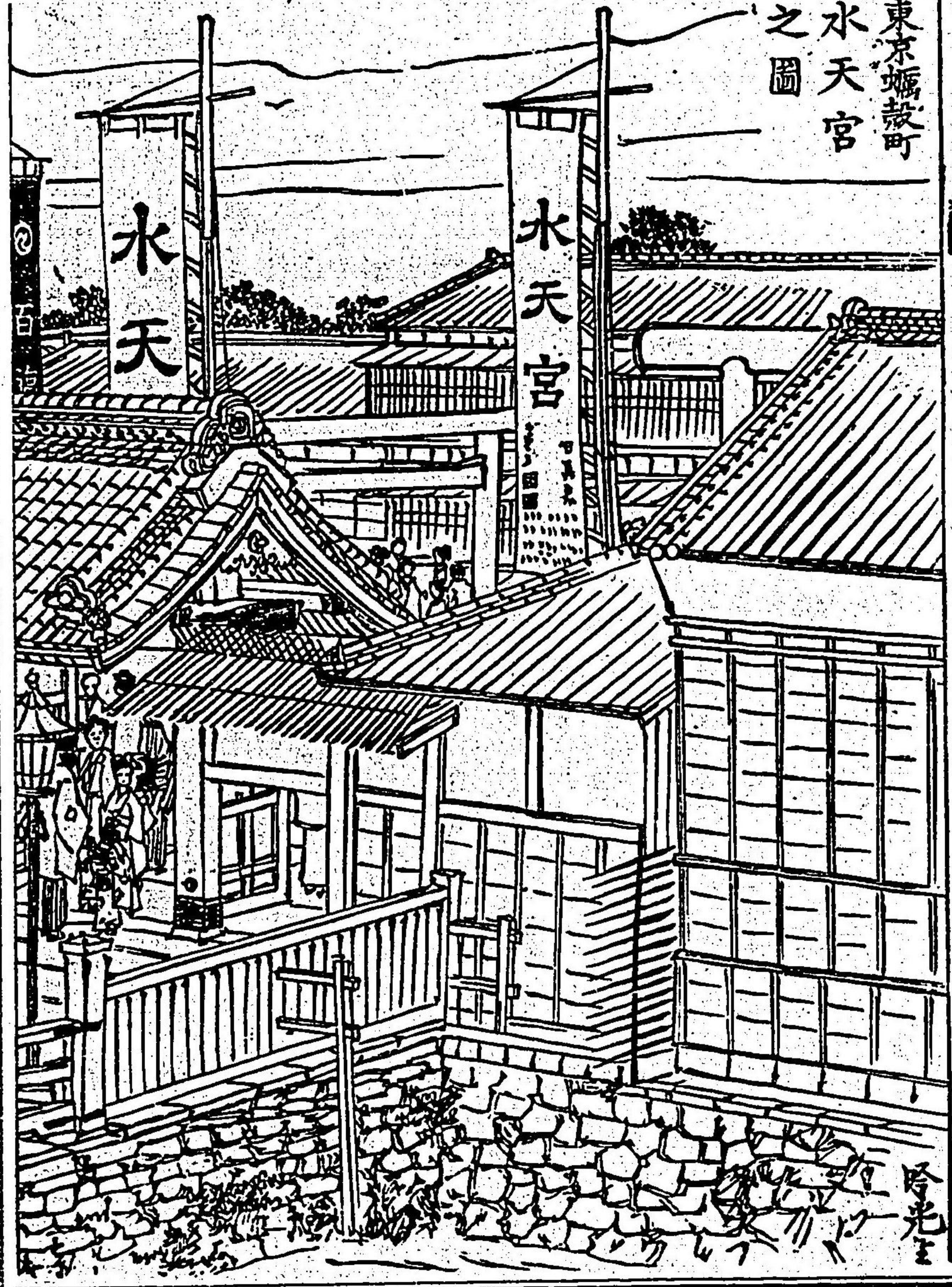
水天宮の初めの前にも云へる如く按察使局後千代
尼が建永建曆の頃野原ふ建てたるの相違なれも
其の頃の世の中亂れたる時代あれば兵亂を避けん
が爲として社も幾度の退轉したるものと見え既に天
正八庚辰年(今茲明治十九年丙戌)より三百〇七年前
毛利秀包久留米城所領の時社母作供料として御井
郡の小森野村において地方二反寄附する旨用人桂
田民部光休より當時の祠職掃部宛てたる文書あり
り次いで七十年立ちて慶安三寅年の既今の有馬
家の所領となりしふ當時社の肥前國下野ふ退轉せる

を再び古への野原の地は復せられし是れ現今
の瀬下水天宮にて爾來連綿として存する所なり社
の筑後川の東岸にありて川を隔れば肥前領あり故
に復社の砌作當主忠頼公より國界の儀なれば見苦
しむらざる様取計らふべしと建築掛り奉行丹下彌
一右衛門へ仰せ付られしとありぬ

江戸水天宮沿革の事

水天宮の儀は筑後國中に申せよ及ばぬ九州地方よ
ての總べて信仰一と方ならむを御靈驗も殊に著く久
留米代々の作領主も歸依淺からむ文政元寅年(今
茲明治十九年)より六拾九年前(御當主有馬玄蕃頭頼
徳公)別けて信仰深く江戸作參觀作滞府中參拜の事

東京堀越町
水天宮
之圖



水天宮御朱印

信光

水天宮御朱印

十四日



人の志を堅固にし特は本社^{ほんしや}の靈驗^{れいげん}著き次第^{しだい}まで説き明まべし

作^{しや}利^り生^{しやう}と申^{まを}は利益^{りやく}を衆^{しゆ}生^{しやう}に授^まけ玉^{たま}ふと云^いへる言^ご葉^は取^とり既^{すで}に神^{かみ}とも稱^たへ奉^{たご}る不^ふの神^{かみ}にていづれの神^{かみ}々^々の内^{うち}にて自^{おの}ら作^{しや}利^り生^{しやう}の厚^{あつ}薄^{うす}有^あるはいの取^とり神^{かみ}々^々の是^これ凡^{ぼん}夫^ぶの最^もも惑^{まど}ひ易^{やす}き所^{ところ}取^とり一^{いつ}應^{おう}尤^{もと}も取^とり不^ふ審^{しん}取^とり此^この惑^{まど}ひを解^とくは先^ま神^{かみ}と申^{まを}も本^{もと}は人^{ひと}取^とり其^{その}の人^{ひと}と申^{まを}すは世^よの中^{ちゆう}に何^{なん}千^{せん}何^{なん}萬^{まん}人^{にん}と限^{かぎ}り取^とりく有^あるも其^{その}の人^{ひと}々は總^{すべ}て神^{かみ}と取^とるや否^{いな}やを考^{かんが}ふべし尤^{もと}も佛^{ぶつ}葬^{さう}まる家^{いへ}々^々にては佛^{ぶつ}に成^なりまじたと言^いひ神^{かみ}葬^{さう}まる家^{いへ}々^々にては神^{かみ}に成^なりまじたと口^{くち}辨^{べん}は

言^いふなれど是^これは唯^{ただ}生^いまゝと死^しまゝの人^{ひと}と取^とり分^わけまて用^{もち}ゆる普^ふ通^{つう}の習^{じゆ}へ過^あぎを誠^{まこと}の神^{かみ}と云^いはんは神^{かみ}と仰^{おほ}がるべき其^{その}の本^{もと}有^あること取^とり必^{かならず}しも尊^{たう}貴^きの人^{ひと}に限^{かぎ}りたるものも有^あらむ平^{へい}人^{にん}にまも其^{その}の本^{もと}を具^{そな}ふれば神^{かみ}なるべし本^{もと}は何^{なに}もどや生^い前^{ぜん}非^ひ常^{じょう}に精^{せい}神^{しん}を凝^こらしとるおや是^これなり譬^{たと}へば一^{いつ}つの木^きの切^きれや木^きの切^きれやを嚴^{げん}しく摩^まり合^あせ見^みよ其^{その}の熱^{ねつ}は強^{きやう}盛^{せい}なるものやなり是^これが人^{にん}間^{げん}精^{せい}神^{しん}氣^きて中^{ちゆう}々^々に暫^{しば}くははめぬものなり是^これが人^{にん}間^{げん}精^{せい}神^{しん}氣^きの遺^いれると同一^{どういつ}の理^りなりと知^しるべし精^{せい}神^{しん}の摩^まり方^{かた}烈^{れつ}しき人^{ひと}ぞ死^しし神^{かみ}と爲^なる其^{その}の熱^{ねつ}といへるが即^{すなは}ち作^{しや}利^り生^{しやう}にぞありける品^{しやう}は變^{かは}れども怨^{おん}鬼^きの祟^たり或^{ある}

は死靈の障りなどいへることは是も精神の摩熱も外
 ならを只善しと惡しとの違ひよく利生とは唱へ難
 く崇り障りと名づくるのみ去れば今日作利生よ
 最も著きは讃岐の琴平宮と本社水天宮よ及ぶもの
 無し是れ如何なる故ぞと云ふは恐れ多くも我が朝
 歴代の帝の内崇徳院と安徳天皇ほど作生涯は精神
 を憐れませ玉ひし帝はあらせられを崇徳院は保元元
 年思召立とせ玉ひし事ありつるも叶はを源平の武
 士等よ妨げられ遂に其の冬十一月をいへるは讃岐
 國よ流され玉ひ此の國よ八年が間ましくたれど
 も歸洛のおとも遂げ玉はざりければ後は供御をも
 断ち玉ひ拳を握り詰め引き籠り玉ひしが作爪の延

びて作手の裏まで透り玉へりと申し傳ふ長寛の二
 年(今茲明治十九年より七百二十三年前)讃岐よて崩
 御ましとぬ此く作生前よ艱苦を経玉ひ作精神の
 摩熱も強くましませばおそ金毘羅宮と祝はれ玉ひ
 てより其の靈驗は永遠の今日まで誠し著きおん事
 皆人の知る所なれ水天宮即ち安徳天皇を始を奉り
 中宮二位尼の作兩方の作艱苦よ至りては遙に崇徳
 の帝よも勝り玉ひて虎伏を山の興鯨吼ゆる海の上
 をおはうと無くさまらひ玉ふのみならを峯の松風
 のそれならで時ならぬ喊の聲よ作耳を驚らし玉ひ
 浦千鳥の啼くねはいづこ只矢叫びの音ぞ作枕よは
 通ふなる哀れと申し奉らんも中々以て愚くなるべ

し人皇以来一百幾十代世々の帝のおん内より、
 かん敷き見玉ひさるは更し其の例あらざる所なり
 去れば御靈の凝り玉ひけんほども推し量られ奉り
 て最畏おし御利生の餘の神々よまぐれさせ玉ふ
 と其の理りなきよあらざるなり穴かしこしや穴
 事

水虎伏せの事

水天宮御本社のみまを九州筑後の國は名よおふ
 日本三太郎川(坂東太郎の刀禰川北國太郎の信濃川
 筑紫太郎の筑後川)の一つなる大川ありて其れより
 枝川となりたる小川の数は幾溝筋とも分れ且は山
 より流れ出るを巨勢川と稱へ此く水利の自由なる

より水田の産米は九州は殆ど並ぶものなき膏腴の
 地なるが是れも亦善しあれば惡しゆる習ひよや右
 の川々よ水虎の多きこと誠し恐るべし水虎のおと
 は他國よも固より無きよはちらむ上方邊よては河
 太郎とも云へり此の東京よても府の市街近傍よは
 稀れなほも郡部よ入れればいづれよも有りと聞く水
 一在りては姿は見えぬものよて偶よは藪蔭などの
 浅水よ出でさるを見さほもの有り色黒く毛ありて
 眼光り長は二尺位と云へり此のもの早苗堀(田植の
 頃を云ふ方言なり)の時候より川々よ出で来り我が
 筑後などよては毎年數拾人も之れが爲よ災を受く
 事なり秋の彼岸水落ちとなりて始めて止む故よ其

の間凡四ヶ月ばうりは村々とも大人は左ばかり
 一恐れざゆも小兒は能く氣を注け水泳ぎを戒め
 おくも小兒どもの事なれば中々暑中の水遊びは止
 めむよつて例毎水虎は引き込まゆ、もの多し作者
 の余も幾とびる被害の小兒を視あるは必を水天宮
 のお守りを掛けざる童なりさ中以上の家にては桃
 色の布は御符を包み小兒の首は掛不置くなり以下
 の家にては篠竹を一寸位は切り其の中は詰めて掛
 くるなり此のお守りを掛不たる小兒の水虎は引か
 れあるおと曾て之れなきのミならむ皆一同は泳ぎ
 居るは守り掛けたる童のある間は引かれたる者な
 し其の童が早く歸りたる跡或は暫く陸は上がれる

間は他の童が引くる、おとなりと幾度も例せし人
 の咄しとりさ尤も必しも悉く水虎の業もあらじ
 小兒の事なれば随分誤ちて溺れ沈みしもあるべけ
 れど其れとてもお守り掛けたる兒は其の難なきは
 本より作利生は廣く水難除けは著き證と申し奉る
 べし小兒の水虎の難は罹るは引かる、は止まりて
 別は言ふべきおとも無けれど大人の水虎は惱まさ
 る、は就きては中々は一つとくさりの咄しあること
 なり是も一と夏は四つ五つ、は聞く事にて大方は
 同じ形なれど其の内は一つ稍念の入りたるを看客
 の物知りの爲は左に記す

橋田村喜太郎の事

何國の村も在郷の習ひとて田植は特更一勢ひよ
く若き男女打ち交りて早苗を植ふ附け例の田植歌
とて「祝ひ目出たや若松さまよ枝も榮ゆりや葉も茂
る」など黄いろい聲とまではかかねど薄萌黄位の聲
は色よて雛子つゝ、植ふ行くが作法とも云ふべし凡
三日四日はかりよ一村植ふ仕舞へは暫く休ひなり
之れを早苗堀休ひと唱へ三日も休息まる事よて若
者どもは一年中第一の樂みとし其所より寄り合ひ此
所は集まり溝の小魚など漁りて酒の肴よし節も無
き義大夫をどうなり合つて遊ぶことなり橋田村の
喜太郎といへるも廿歳内外の若者よて水神の森の
定相撲よては横綱位を氣取りて居る上は調子者を

りしが是も友達の所よておしめん傳兵衛の此渡し
酒おうまどんの無理酌は盛り潰され最う溜らぬと
馬屋の横から逃げ出し新溝端をぶらりよと通
り掛けし頃には早夜の五つ、ともいふ時刻なり何
氣なく歩むとさんドツコイと揚げた左り足を取る
ものありよろりとして踏みめ後を見れば色黒の
小童なり小しやくなる餓鬼め此の立花關を見知ら
ぬかと言ひさま片足を舉げて蹴飛ばせば其の童は
聲を上げ皆来いとよと立花が出て来たぞと呼ぶよ
出たともよとよと四五十ほども来たりて獨々飛び
附くを苦もなく抛り飛ばしは飛ばせしもの、是れ
でも矢つ張り多勢は無勢少しは困りて居たる折柄



橋田村
喜太郎水
虎と角力
の圖

備水會



哈光

不不不不不不

二十一

不不不不不不

童どもが聲々々花れ川は米ぬかど云ふ關取は常
 持(前)より出でたり橋田より三里の早苗掘相撲に出
 きたりと言ふ聲をるは皆々喜太郎に向ひ立花關や
 今日是我々の關取他行し付き明晩今一と勝負を
 し必む相待つとの約束にて喜太郎は我が家より歸り
 たるがが、る魔類のもれと取り合ひたる事なれば
 忽ち総身大熱を發し諸言のみ呶鳴り立つるよぞ扱
 は例れ水虎より附かれたるか早く水天宮のお札を戴
 かせよと取り騒げど近所にも持ちたる者無し名主
 どれよ走れとて若者一人急ぎ名主へ参り右に次第
 を申したれば易き事なり丁度此れ四月より受け置
 たるお祭りの摺り立てありとて貳枚與へたり使は

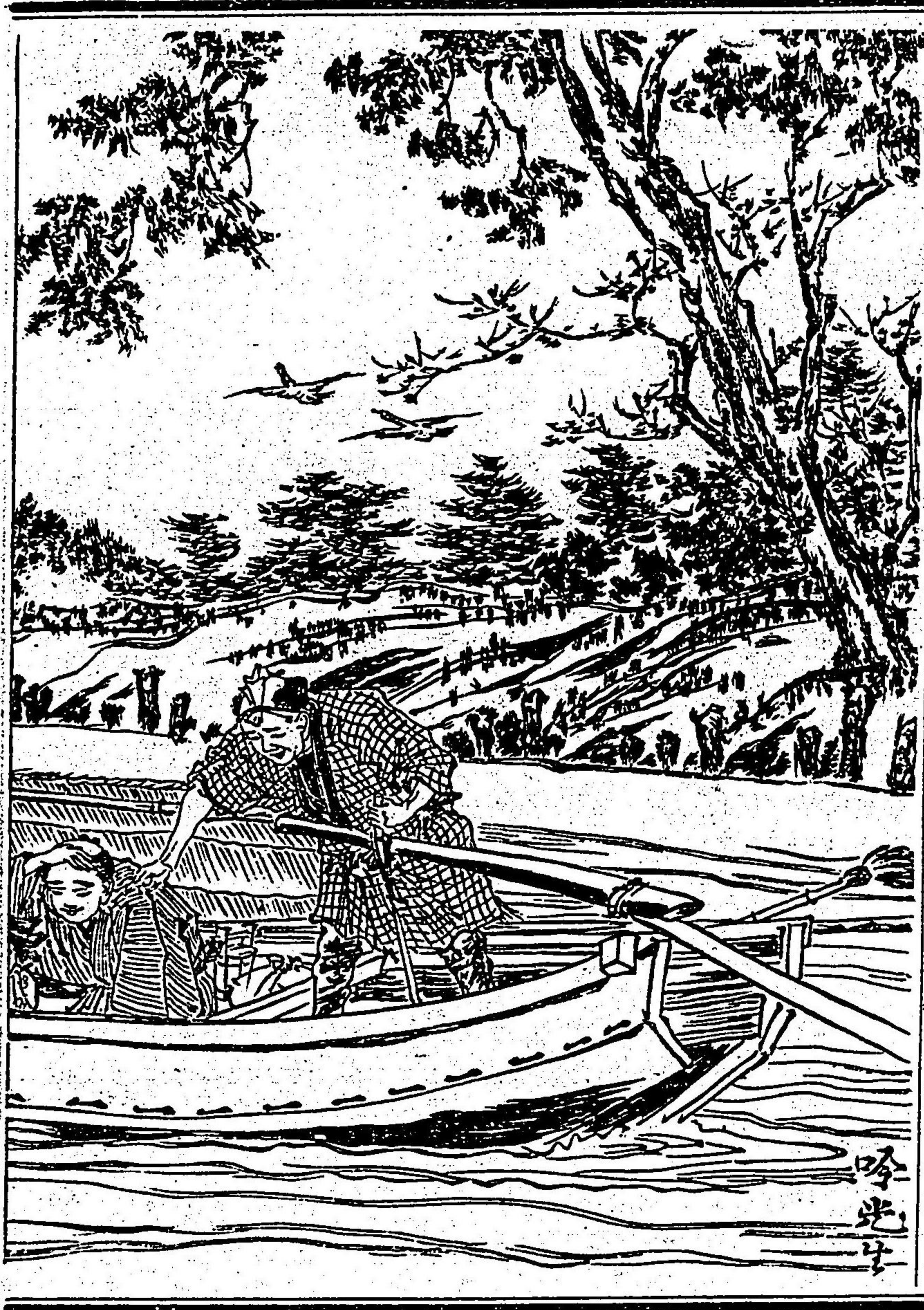
直ちよ持ち返へり差し出したるは皆々喜び一板を
 丸めて水より浮かし吞ませんとする中々拒みて吞
 まざるを大勢して強て口より流し込みたりやがて咽
 を通ると見えしがこはいかよ今まで狂ひ居たりし
 喜太郎其の儘忽ち静まりて續きて寐入りたりけり
 翌朝よ至り目覺めて氣分も慥かなれば皆々案堵し
 前夜の事を尋ねしは臆氣よは覺え居りて氣味悪る
 き事なりきと恐れ居たるが其の日も早暮れて夜よ
 入りたるに表の方より呼びたりとて喜太郎スツク
 ト起ち駆け出さんとするにぞ皆耳を立て聞けども
 他の者へは更お物音聞こえを喜太郎は獨言ふて花
 川關が歸りて来たりとや去らば我も直ぐお参ら

んと返答をるもの、如くやがて表に駆け出るよぞ
 皆々驚き水虎めが呼出しふ来をつたぞと辨めけど
 目も見え耳も聞こえねば追拂はん様もなく
 唯喜太郎を押し留め居たりし一人が氣附きてお
 札が一枚残り居るぞ是れにて追つ拂ひ見よとてお
 札を持ち来り竹の先に挟み表に出で、當ても無く
 振り廻はしたるよ他人おは見えねど喜太郎が一所
 一往くべし何故に先に歸るやと呼び止むる躰なり
 しが又何お尻前様のお出でを返せぬと申すの
 敷と言ふ内皆々寄りて無理お家内よ引き入れたり
 此の躰ふては心元なしとて右のお札を表の簷の柱
 お貼り付け置きたり翌晩お至りて喜太郎又も起ち

上りしが何と申もど尻前様の滞留では困ると
 な去らば此の札取り除けんと騒ぐを家内のものと
 も漸く押し止めたりければ其の翌晩よりは遂に
 来らむなりけり誠著き靈驗と皆々尊みけり
 附り水虎よ引き込まる、は大抵小兒よ多し大
 人は先相撲の相手よせらる、位なり是れよ付
 き面白き咄あり竹重村の興作といへる男巨勢
 川の岸邊よ住み本より貧窮よ暮らしけるが或
 る夜川よ漁しける時多くの水虎出でて来て相撲
 取らんと云ふにど興作己れは貧乏人よて漁縁
 ぎ忙しければ相撲など取る隙なしと言へば其
 は心遣ひよ及ばむ相撲だよ相手よなりて呉れ

なば魚は望みよ與へんと云ふ然らばとて大勢
を相手よ一時許も取りて家よ歸りたれば程無
く表の戸を扣く音を與作立ち出で見れば八九
寸もあるべき大船拾五六尾も置きてありけり
大よ喜びて翌日費り代なし其の夜よりは手前
から逆寄せに相撲よ出掛け三四ヶ月が間は絶
えを船を取つてもらひ一夏安樂よ暮したりと
云ふ熱談づくなれば魔物の邪氣ふも觸れざる
ものかと皆人不審し合へりかゝる風變りの男
澤山出来たらんよは水虎の方で水天宮のお札
を戴く様よなるべしとて大笑ひなりし
逆流れの御靈験の事

水天宮と稱し奉るほどのおん事よて御生前水の上
にて限りなき御艱難よ達はせ玉ひたれば船乗る人
よ特お御利生著く其の數々の限りなければ今此こ
よ分けて新なる御靈験を掲げ奉るべし
一筑後國生葉郡の商家よて泉州屋伊平と云へるの
文政此頃の豪商なりしが或る年暮れ久留米の城
下へ商用よて筑後川より夜船に乗り下りぬ其の頃
繁昌の時代なれば手代伴當二三人外お酌女ども、
乗せ船の中よて酒宴を催し果ては歌ひつ踊りつ興
に入りたるが伊平不圖氣附けば傍に紙入れ見えむ
其所此所と捜まに皆々も驚きともよ捜せどもあ
りよ無し伊平よくよ考るに扱の懐お入れ置きよ



吟光生



水天宮の
御礼逆水
流れる圖

るが先ほどの踊りの時水中に抛り飛ばせしむらむ
 金も百兩ばかり外に今度の商用に大切なる書類も
 二つ三つ入り居たり之れを無くしては大變なりと
 騒げどもいつの間はいづれの所にて飛ばせしむも知
 れぬおの何んとせんと各途方お暮れしが一人が水
 天宮のお札を流し見れば必お在り所分るべしと言ふ
 に皆々其れの一應然ることお在り是れの下り船な
 り何づこまで船を返してお札を流まべきやのほど
 も分らむと言ふ是も尤なり然れども外に頼まん術
 もな一唯神徳を仰ぐのみと伊平の直ちに衣を脱ぎ
 舟端に立ちて桶おて水四五杯被りて體を淨め水天
 宮の方を遥拜祈念なしたり大寒の時候川風の綱よ

りも利どきさへあるふ川水を汲み上げての寒垢離
 見ると恐ろしきばかりなり伊平の手を合せ南無瀬
 下水天宮南無尼御前大明神水難擁護のお誓ひ空し
 うらむ伊平一世の難儀救はせ玉へ助け玉へと念
 誦してお札を捧げて水面にぞ浮かばせ奉りける時
 不思議や御札の水の流れにも拘はらむ水上の方へ
 と上り玉ふぞ船の人々膽を潰し恐れ驚き扱の水
 天宮納受まじりて逆水先の案内示し玉ふぞと船
 頭の直ちに船を逆りし楫押し立て、作ん供をれ
 ば五六丁ほども上りてお札の止まり玉ひけりあら
 有り難やと船をとめ此の所の洲先にて水の二尺
 ふ満とざりけり松明振りて照らし見れば底清き砂

の上、彼の紙入れの沈み居て丁度其の真上にお札
 の浮きとるまゝ、動さもし玉はぬ此所に在ると
 宣ひぬばりなり餘りの奇特は伊平は更なり船の
 人々随喜の涙を流し一時は聲を揚げ南無水天宮南
 無尼御前大明神と連けさまは稱名唱へ奉りしは理
 り責めて最尊し溺死人の沈むたる所を探るは此の
 お札を流して有り所を知るは毎度の事なるが其れ
 は唯流れ止まり玉ふまでなり此く逆戻りの靈験は
 始めて見聞し奉りたりと各言ひ傳へて信仰益盛ん
 なりき扱も稀有の御事と申し奉るべし

水天宮御利生記卷上終

